

日本の大学教育における英語学習の成功への道のり

浜 田 美佐子

はじめに

日本の大学教育における英語学習には、何が不足していて、何が過剰にあるのだろうか。また、日本の大学教育における英語学習の、どこに不満が生まれ、どこに改善の余地が残されているのだろうか。

私は、学生たちの体験する英語学習の楽しみや不満を目のあたりにして、その時の発見を自らに重ねてみては、彼らと自分との根源的近さに目を見開かれる思いをする、英語学習者の一人である。日本の大学教育における英語学習の長くて、楽しい挑戦であろう、成功への道のりを、私が抱く英語学習「異文化」体験の一端を開示することで、これから提案していきたい。そして、日本の大学教育における英語学習の長い道のりの末に待つ、明るい未来を、私たちの共有する現在の英語学習の現段階における達成目標として位置付けたい。

1. 旅立ち

まず、シンプルな質問から始める。私たちの英語学習の成功への道のりは何故こんなにも時間がかかり、なぜこんなにも問題含みなのだろうか。決定的真実に、私たちが目をつむっているせいなのではないだろうか。

私の用意した答えはシンプルである。私と学生とが、共に、具体的に語ることを好まない傾向をもつ「日本文化」の特長を共有しながら、明確に述べることを基本的に正しいと考える「英語」を学習しようとしているからである。また、この事実の認識を共有することもなければ、同時に、この認識を英語学習の活動において具体的に実践もしていないからである。

私も学生と似ていて、本当に大切なことは心に秘めているのである。異文化の存在に学生の知的理解を導こうとはしていても、意識的に、私たちの具体的な英語学習活動において、この異文化理解の要となる「英語」という言語の構造の在り方が「異なる思考」を生み出していることの理解を、英語学習へと繋ぐべく、十分な時間をかけて学生に対し、説明をしてはいないのである。異文化に対する知的理解とその具体的実践である言語活動と

を、明確な言語で接続させていないのである。彼らの知的理解に、充分働きかけてはいないのである。

では、「具体的には話したくない」とする日本語の立場と「具体的に述べない限り、話したことにはならない」とする英語との、この一見相反する立場を、私たちはどのように双方の基本姿勢を否定することなく、共存させ、なおかつ、この矛盾的行為を自らに飛び越えさせることができるのだろうか。この「飛び越え」に対する、心の在り方、心の準備とも呼べそうな基本姿勢と、この「飛び越え」を実現する具体的な活動方法（共に、未来への提案）と、この考え方に到達することとなった、証拠とも言うべきこの考え方の根拠のプロセス（現在に至る私の「英語学習」体験）を述べるのが、本論の目的である。

まず心の準備として、私たちは、英語からその基本構造が遠く離れている「日本語」という母国語を上手に操るがゆえに、その母国語である日本語の思考回路から簡単には抜け出すことができない、日本人英語学習者であるという認識をもつことが大切である。そして、英語学習スタート地点から、すでに「失敗」することが言わば折り込み済みであるのだから、仮に英語学習において「失敗」しそうになったとしても、私たちは驚くことはない、まずは腹をくくりたい。こうすることによって、教える側と教わる側の苛立ちは激減する。教える側が悪いのでも、教わる側が悪いのでもないのである。まずは、肩から力を抜こう。

次に、言語の距離が離れていることによる日本語と英語の違いが、日本人の英語学習を困難にしていることの認識が共有されれば、例えば、練習問題で穴埋め等にトライしている時は正解を当てることができても、実際に英語でスピーチ原稿などを作成しようとなると、学んだはずのことと違う方向に英語がスルスルと発展していつてしまうこと等にくよくよする必要がなくなる。その練習問題の適切さの是非はともかくとして、英語と日本語は発想が違うのであるから、この違うという事実を、日本人英語学習者は認識して、英語不得意意識の呪縛から身を振りほどくことである。そうすることによって、「英語も使える日本人」という新しい道に、自らの日常を繋ぐことができるようになるだろう。この基本姿勢を、教

える側と教わる側は共に言語化し、分かち合いたい。教わる方と教える方が共にそう知っていることが、大切なのである。

また、事実であれ勘違いであれ、例外的に、英語に得意感を抱く人もいだろうが、私もそのうちの一人であると言えるが、その人も含めて、私たちにとって英語学習は難しいプロジェクトであると理解を新たにしたい。真摯に、英語と日本語が違うという、このプロジェクトの難しさに向き合う努力をしたい。向き合えなければ、間違った方向に時間を浪費することは、体験からすでに分かっている。反対に、両言語の違いに向き合おうとすれば、同様に時間はかかったとはしても、迷いは消える。英語学習の資質がないと「葛藤」する必要もない。その時の気分任せて、できる振るも、できない振るも、する必要がなくなる。見栄を張ることも自己卑下をすることもなく堂々と、私たちは日本文化を共有し日本語を母国語とする英語学習者であると認識し、であればこそ、日本語の意識のその上にそのまま、英語学習を移植することはほぼ不可能であると、明確に理解すればよいのである。

そうすることによって、英語だけでなく、日本語だけでもない、第三の道が開けてくる。私たちは英語学習のためでさえ、私たちの魂を売り渡すことはできないのだから、私たちは私たちの文化のもつ「恥ずかしい」という気持ち失うことはできないのだ。だからその気持ちを失わずに、この「むしろ語りたくない」という姿勢を尊重しつつ、具体的に語らなければ語ったことにならないとする「英語学習」を実践するために、英語学習成功者となり英語も使える日本人学習者となるべく、自らを「脱皮」させたいのである。

私の専門分野は文学である。しかも、詩である。小さいころから言葉が大好きだった。今も言葉が大好きである。英語も日本語も。でき得ることならフランス語もドイツ語も。前者は大学生の時に英語以外の「第二外国語」として学び、後者は姉の結婚に伴い、分かったら楽しいであろうとテキストを買ったことのある言語である。もちろん、共に使えない。音だけ少し記憶に残っている。夢の中で学習したいと願い、一応テキストとテープを買った言語に、ギリシャ語がある。旅行した際に、少しは役立ったものの、今は何も覚えていない。私は、外国語学習に並々ならぬ関心をもつ日本人の英語学習者である。

2. 固定観念

まず、私の英語教授法に対する開眼とも言うべき画期的な事例を一つ紹介する。かなり昔のことだが、英語を得意としない学生のグループを教えた時のことである。楽しく学んでもらいたいと考えた私は、正規のリーディングを中心としたテキスト以外に、副教材として、映画のビデオを見てリスニング力を付ける時間を、毎回全体で90分の授業のなかに30分くらい、用意した。このビデオ教材にはテキストもついている。学生は文字を通して内容を理解できる。

成功するはずだった。内容は学生の興味を引く楽しいものだった。教える側としての私の準備は、内容を聞き取れるようにしてることと、その英語を発音できるようにしてること、分かりづらいところを説明できるようにしてることである。授業中は語句の説明や文法的解説に加えて、発音指導もある。上手くいくはずだった。学生たちは私の指導に基づき練習を重ね、聞き取れるようになり、ある程度は正しい抑揚で英語を発音できるようになると、私は考えていた。私が出来たことなのである。その私が教えるのである。時間さえかければ、彼らもできるようになるはずである。

何回かビデオを見て楽しみ、音にも慣れたと考えた頃、私は快活に質問した。「聞き取れるようになりましたか？」学生で反応を示してくれた一人は予想に反し、「難しかった」と言う。そこで、「どうして聞き取れなかったと考えますか？」と尋ねた。「練習がもっと必要である」など、回数を増やせば何とかかなと納得するような答えを予測していた。だが、違った。学生曰く、「私たちの使う英語とは違うからです。」

のけ反りそうではあったが、踏みこたえた。その発言の意味をすぐ理解したからだ。私は教える側として、常に、学生に聞き取れるように英語をゆっくり、はっきり発音していたが、映画の俳優たちは自然な速さで不明確な発音部分も含めて、英語をナチュラルに話している。「授業で学ぶ英語は普通の英語とは違う」、こんな単純な真実に私はなぜ今まで気付かなかったのだろうか。

教えるということは、常に明確なプレゼンを通してでなくてはならないと、私は固定観念をもっていたのだろう。しかし、いつも聞き取れるように発音していたのは、普通の速度の英語を聞き取れないまま、学生は無為に時を過ごしていたことになる。私が普通の速度で英語を話して理解できる学生は少なかったが、だからといって、永遠にゆっくりとした英語を聞いていても、学生の能力に変化は現れないだろう。この速度に慣れれば、更

に速度を速めても聞き取れるようになるはずだと想定はしていたが、確認はしていなかったのだ。練習と目的がかみ合っていないかったのだ。

私は明確な目標をもって教えていたのだろうか、反省した。英語を使える日本人を増やしたいという目標から、今より上手になればよい、このクラスの単位をとれるようになってくれればよいと、いつの間にか私の目標値を学生にとっての達成可能な範囲へと、スライドさせてはいなかっただろうか。

別の問題を意識させられる場合もあった。別の時期の、別のクラスで、私はペア練習を通して、会話の台詞を覚えるための反復練習を試みていた。このクラスは正規のクラス外に専任英語教員がもつ「イエス・プログラム」という、授業外の英語クラスである。私が子どものころ通っていた小学校には正規の英語の授業があって、私は小さい時から「リピーター アフター ミー」を含む所の、英語反復練習が好きだった。子どものためか、授業中に覚えてしまう。耳が良かったのか、集中力があったのか、発音も上手で、褒められるという成功体験をもつ。反復練習の効果を、私は体験から、実感していた。

ところが、授業中は時間をかけて練習をすることのできない会話文を、ペア練習で繰り返し覚えるまで練習するという活動を「イエス・プログラム」で何回かした時のことである。他のペアは楽しそうにやってくれていたのだが、一人の元気な学生が不満そうに、こう言った。「どうせ忘れるのに、なぜ覚えなくてはいけないのですか。」

のけぞりはしなかったが、私は「私たちの使う英語とは違うからです」の時と同様、虚を突かれる思いがした。そして、学生の発言内容の正当性をすぐに理解した。そうか、忘れるのか。忘れたらまた覚えればよいと私は思っていたが、それはつまり私が覚えることが好きだけであり、だからこそ忘れたら更なる反復をすればよいと、限らない反復練習を想定していたのだが、そしてそれが「覚える」という行為であると考えていたが、覚えることが難しい人も存在していて、だからそういう人は効果を実感できずに目的意識を失うことがあるのだと、初めて私は知ったのである。

同時に、「何が目的か」の必要性を、私は学生に理解してもらってからリピーター練習を始めていただろうかと自問した。英語の発想に慣れるため、慣用語の記憶歩留まりを高めるため、英語が得意である自信がつくようになるため、英語の抑揚を身に付けるためなど、練習の目的を理解してもらえるように、伝える努力をしていただろうか。

人は忘れる。それなのになぜ覚えるのか。私のとっさ

の答えは、「忘れるから覚えようとする」ことに意味がある」なのだが、「忘れるから覚えようとする」という考えは、考え方なのではなくて、言葉を繰り返し発することが好きであるという私の生理現象のようなものであったのかもしれない。学ぶ人の個人差というものが存在すること、語学を学ぶことの意義や楽しさには個人差があること、私の「英語学習」当たり前事項は学生の当たり前ではないことを、初めて実感した。国の違いもあるだろうが、人の違いもあるのだ。また時代の違いもあるだろう。私の子どもの頃は外国語を学ぶことは外国を知ることであり、外国に行くことも意味していた。外国語を学ぶこと自体、ワクワクすることだった。

反復練習に対するこの素朴な質問は、好きな歌はカラオケで何度でも歌うとしても、それほど熱を入れていない英語が繰り返しの対象であるとき、英語力を付けるといって何ら貢献をしないかもしれないことを示唆する。反復練習自体は、人によっては退屈で効果を上げない練習方法になり得るのだ。だからこそ、動機付けが必要なのであろう。何を覚えるために「繰り返し」練習をするのか、そしてなぜその「繰り返し」が必要なのかを、言語化しなくてはいけないのだ。目的の明確化とその必要性の認識を共有する必要があるのだ。

既に英語を六年間学んで来ていて、それぞれの学生が学び方の癖や、学び方において喜びをもてなかった体験をもつ場合もある。これが、大学における英語学習の現実である。挫折体験の方が成功体験より多いかもしれない。実際、私は「何々」で英語はだめになりました、という話をよく学生から耳にする。「高校で」であったり、「中学の時すでに」であったり、「文法で」であったり、内容は様々だ。しかし、大学にきた段階で「英語」に対する固定観念はすでに、私の教授法同様、それぞれの学生が英語との関係性においてもっている。だからこそ、共通認識を新たに共有する必要が生まれてくるのだ。

3. 「何」が「どうする」という英語の基本構造

学生の英作文やスピーチ原稿を見ていて、一番強く感じるのは、「主語と述語」をセットとして置くという意識の欠如である。これは個人の力ではどうしようもないくらい、日本語の文章構成語順が英語とは違うことに影響を受けているためであると想像する。何度も英語と日本語の語順が違うことを黒板に書き、発想が違うのだ、見えている世界が違うのだと力説し、口頭でも繰り返し、提出物を出してもらった際にも改めて注意を喚起してさえ起こり得る、ミスエイクなのである。

色々な場合が考えられるだろうが、英語で「目的語」と呼ぶあたりから文を始めることが日本語の文章構成の場合はよくあるので、ついそれにつられて、学生たちは目的語に当たる語を英語の主語の位置に置いてしまうことがある。つまり、頭に思い浮かんだその順からあまり意識をすることなく、英文を作り始めてしまうのである。

「りんごを食べました」は、つい“Apples”と口からでてきてしまう。日本語の発想では欠落することのある、英語で「主語」と呼ぶ語を補うことも英語で語る時は必要になるので、誰が食べたのだろう、などと、改めて意識の上に浮上させない限り、“I ate some apples yesterday.”というような単純な文でも、作りづらいと日本人の英語ビギナーは感じる。今日本語の時にはことさら意識することのない「いつ」に当たる「昨日」を加え、漠然と数を示す「いくつかの」に相当する英語を加えたのも、その方が自然であると、英語を使う人は感じるので、無意識に加えてしまうのだが、これを、あまり英語を使うことに慣れていない日本人の場合、意識的に加えていくことになるのだから、大変と言えば大変である。

当たり前のように今りんごを“apples”と複数形にしたが、日本語の世界観では一つでも複数個あっても、あまり気にしないで文を作るのだが、英語の世界観では明確化しなくては、その対象物は正しく特定されないで、英語らしく響かない。だから、「一つ」だったかもしれない時は、すかさず“an apple”としなくてはならないし、もしかして話の流れでは特定のりんごであったのなら、すかさず“the apple”としなくてはならない。ぼんやり意識のなかで隠れていた「主語」を選び、数の有無や冠詞は付けるのか付けないのかを決定し、しかも「主語」とセットとして英語では機能する「述語動詞」も即座に決定し、その語を発声しなくてはならないという一連の行動は、日本語の世界観に浸っている者にとって、精神的に高い負荷をかけられることになる。

しかも英語のリズムから言えば、「主語」と「述語動詞」はセットとして同じうねりのリズムの中で発音しないと英語らしく聞こえないから、日本人の感覚でいえば、ややフライング気味に動詞のことも主語のあと即座に考えなくてはならず、忙しいのである。日本語であれば、時を説明したり、場所を説明したり、方法を説明したり、接続詞を付けてどんどん文を長くして、主語や目的語の姿かたちさえ、もう見えなくなったくらい最後の方にやっと登場するのが動詞にあたる語なのであるから、日本人の考え方のリズム感や間の取り方からすれば、サーカス並みのアクロバティックな曲芸が必要とされることになるのだ。しかも述語動詞のあと、英語はすぐさ

ま目的語を用意しなくてはならない。日本語と考える順番が反対だから、日本語の世界観的思考回路に浸っている場合は、まだ何も頭の中で合成されていない状態の時に、結論を出すべく動詞を特定し、それに見合う主語にとっての対象物である目的語を、新たに用意しなくてはならない。しかも、人は言う。「英語で考えなさい。」

4. 英語で考える

すべては、ここから始めるべきなのである。「英語で考える。」すなわち、英語と日本語は別の言語体系をもっているということを認める。その言語をもってして広がる世界観は、その語順が違うことから類推できるように、異なっている。だからこそ、違う言語なのである。日本語的発想法に英語を移植しようなどとせず、日本語表現の執拗な英語翻訳への拘りを捨てる。英語の発想法で考える別の思考回路を、日本語の思考回路のとなりに構築する。これを意識的にやってみることが必要なのだ。

方法は英語アスリートになることである。英語筋肉をつけるのである。ここから、意味のあるリピート練習の必要性が理解されるだろう。早く発音される音をキャッチするための、速読音読の必要性も生まれるだろう。日本語の思考回路が私たちに保証する恥じらいを維持しつつ、私たちは明確に自己決定を迫る言語構造をもつ英語の思考回路をもつようになる。複眼を兼ね備えるのだ。他者を知ることによって自己を振り返ることが初めて可能となる、これが「異文化理解」である。

「国際的」という言葉の意味は、英語が話せるとか、英語文化に詳しいという一方通行的なことではなくて、英語と日本語の両方を知ること、「自国的」でしかなかった人が、複数文化を知ることによって視野が広がることを意味するのだ。複数の国籍を親にもつ子どもたちがそうであるように、互いの文化が別人格で共存することに意義を見出すのである。決して、まぜこぜにすることではないのである。二十一世紀に生きる私たちは、他者の存在を理解することで、自己理解を深めるのである。日本に居ながらそれを為し得る人もいれば、日本を離れてそれを為し得る人もいるだろう。行ったり来たりして、文化のはざままで新しい苦しみを体験しながら、複数思考回路を育てていく人もいるだろう。違う世界があることを知ることは喜びである。自己を強靱にする。そしてそんな世界を垣間見たら、もう知らなかった過去に戻ることはできない。私たちは新しい知の世界を生き始める。これが、新しい言語を使うことの喜びである。実践できた時、それは筋力と喜びを伴った、知的活動となる。

5. 私たちの場合

私が長年の教員生活から自己の英語学習を改めて見直すことが出来たのは、前にも述べたように、英語があまり得意ではないグループの学生たちとの英語授業を数年にわたり行ったことと、正規の英語授業の他に「イエス・プログラム」という学生たちの英語勉強サポートクラスを運営するようになってからである。

それまでは、授業中に見る学生の顔が私の知る学生の姿の全てであった。しかし、英語理解が不得意な人たちを前にして、しかも彼らがそれなりに真摯に取り組んでくれているにも関わらず、成果がなかなか現れないのを目にするにつけて、また比較的良くできるのにやはり日本人らしい初歩的な間違えを簡単にするのを見るにつけて、何が彼らの理解を邪魔しているのだろうか、私は自分の英語の教え方に試行錯誤を繰り返すようになった。

また「イエス・プログラム」で、授業中には見せない学生の表情や言葉や考え方を知るようになって、私も教える側の仮面をとり、学生と共にリラックスして英語を学ぶようになった。そんな「私たちの英語学習」が始まってから、長年、自分のこととしては考えてこなかった問題の数々が、実は私の英語学習の根幹で未だ解決を見ない課題でもあったこと気付いた。気付くためには、ある特定の時期と共通体験をもってくれる仲間と素直な心が必要だった。当然のことである。英語学習に対して抱く固定観念から身を振り払うのは、一人では難しい。他者理解を通して、初めて自己理解が始まるからである。

私の自己理解を疎外するものは、意外にも私を形作ってきたものであった。私は長いこと大学で英語を教えてきた。私立であったためか、小学校から、時にネイティブ・スピーカーの宣教師の先生より英語を教わり、英語クラブに所属し、教育テレビの朝と夕方の英語番組の全てを再放送も含めて見続けた。小、中、高と、英語の成績は多分、常にトップクラスであり、高校の時はたくさんの英語選択科目も履修し、授業の他にも「英会話学校」に通い、大学では英文科を卒業し、大学の LL 教室にも自主的に通い、その後、アメリカで六年間勉強し、アメリカ文学専攻で学士と修士も終え、博士課程ではコースに必要な単位をすべて修了し、Ph.D 候補者となった。日本に戻ってからも同時通訳や翻訳の養成所に通い、やたら英語を勉強してきたのである。知らないことがたくさんあることはよく知ってはいたが、根本的な理解はもう終わっていると思ったのであろう。日本人である私の英語学習に学生と同じ問題点を見なくなかったのかもしれない。愚かなプライドがあったのかもしれない。

正直であることは、常に私を最も強くしてくれるにも関わらず、現実を見つめることが本当にはできていなかったのであろう。

しかし、機は熟していた。大学生との英語学習に加え、生涯学習という地域に開かれた講座を新たに担当するようになって、私のなかで何かが変わったのである。それまでは、小さな専門分野を大切に守って生きてきたのだが、当たり前のことながら、世界は広いことを知った。日本の外にアメリカがあるという広さではなくて、「勉強」の在り方にも幾筋もの道筋があることを理解した。見せかけの知識ではなく、学ぶ行為自体の中身が楽しいことが分かった。そんなことは、実はずっと前から知っていたはずなのだが、忘れていたのだらう。心の在り方に不思議な癖がついていたのかもしれない。ある分野において少しだけ「賢く」なってきたが故に、全体としては脆弱になっていたのだと思う。

初めの生涯学習の講座は、私の専門とするエミリー・ディキンソンの詩を読むという企画であった。驚いたことに、学会では難しいとされる彼女の詩を、受講生の方々は楽々と理解されたのである。その時、一体「専門」とは何を意味するのだろうかと考えた。また、その生涯学習で、英語力アップをめざす通訳練習法を活用した英語講座を開いたことがある。この時も驚いた。私のやり方で学ばれると、みなさんがどんどん上達されて、またみなさんが難しそうにされる所は、私の場合とまったく同じ所なのであった。私に特別なものは、ほぼ何もなかったのである。私も日本人英語学習者であったのである。当たり前だ。

このような体験をもとに、私の認識に変化が生じ、「私たちの英語学習」が楽しくなってきたのだと思う。私は小さい時から言葉自体が好きだった。それだけのことである。まだ英語が良く分からない頃から、お使いの道中、デタラメの英語もどきを話しながら歩くので、母親が恥ずかしがったものだ。私は唯、異国の言葉のもつ音自体が好きだった。音を通してあれこれ想像することが楽しかった。よその国とはどんな所であらう。ごくごく普通の想像力である。子ども時代の繭にまわりを守られた、弾力に満ちた無限の世界だ。そしてなぜか、現実世界のこともよく見ていたのである。子ども時代がもつ「世界と日本バイリンガル」状態だった。

時は過ぎ、勤務校の大学内英語スピーチコンテストが開催された時のこと。多くの学生の指導を行った。授業内活動ではなく全学に関する企画である。賞を得た学生には名誉だけでなく賞品も授与される。だから学生のためにも、いつも以上に指導に力が入った。良い体験をし

てもらいたいし、英語学習における成果も、参加者にそれぞれ実感してもらいたかった。

指導をしていくうちに、授業中はかなり英語が上手であると思われた学生も、英語でスピーチ内容を書き始めると、細かいミスをすることが分かった。単純な動詞の活用の間違えもあれば、複雑な内容になっていくにつれて、英語が日本語の形をとりだすこともあった。つまり、語順が乱れ、日本語のもつニュアンスに拘り始め、そのうちに、文章が英語としては意味不明となっていくのである。しかし、最も興味深かったことは、具体的に書くことをなぜか多くの学生が嫌がり、一般論や抽象論を書きたがり、また言ってしまうと内容が分かり易くなると私は思うのだが、具体的な名称は隠したがる傾向があることだった。

同じような目線で見直した時、私の担当する「イエス・プログラム」では、クラスの復習や予習をして、またそれと同じような考え方で運営される「オフィス・アワー学習支援」で、私の場合は「英語で話す」という企画をこの数年間やっているが、そのどちらの場合でも英語で例文を各自が作る。また、短い会話をテーマに即して質疑応答の形で、各自が英語で発表する。そうやって、学んだ事柄の具体的確認作業をする。出席するメンバー構成にもよるのだが、そこでもやはり、具体的なことはあまり語りたがらない傾向があった。しかし、英語では具体的に述べることなくしては、英文そのものが英語らしく響かない。言っても言わなくても情報量において同じことは、英語では、何も言っていないことになるし、文章としても不自然なのである。情報がない不明瞭な文はおかしいのである。発言した目的を達しないからである。しかし、日本語の場合は、言っても言わなくても同じであっても、言ってみると何かが加わるように日本語的には感じるのだ。日本人がもつ、このシャイというだけではすまされない文章構成自体が誘導する曖昧さは、具体的に述べることで精彩を放つ英語文章作成と、どのようにしたら、共存可能となるのだろうか。どうしたら、日本人も具体的に英語を表現することで、普通の英語を操れるようになるのだろうか。

6. アクション！

具体的なこと、つまり個人的なことは、むしろ語りたくないという傾向をもつ日本人英語学習者にとって、英語学習環境は繊細な問題である。教室のサイズは大きすぎてもいけないが、小さすぎてもいけない。大きい場合は周りの人との一体感をもちづらいが為に、安心できな

い。小さければ良いだろうと思いがちだが、自分の存在が目立ちすぎるので、同様に快適ではない。

講成員の数はどうだろうか。教えている感触から言うと、少ない方がこちらのアドヴァイスに抵抗なく気持ちを合わせることができて、発音の練習も音読練習も細かい解説に沿って英文を言い直すにしても「恥ずかしい」という感覚がなくて、良いと感じるのだが、教室サイズの大きさ同様に、自分の存在が目立つと感じる学生も少しはいて、ある程度人数がいた方が良いと述べる学生もいる。しかしこれは、さぼりづらいという特殊事情があるためかもしれない。

イエス・プログラムなどで見ていると、やはりクラス構成員の数が少ない方が参加することに対する抵抗感が減って、仮に間違えて発言しても、「恥」のように感じることは少なく、リラックスして参加できていると思う。新しいタイプのクラスで、従来の共通に運営される英語のクラスより、少ない人数で運営されるクラスがあるが、この新しいクラスの場合、もちろん構成員の性格や学生たち相互の仲良し度にも左右されることとは思うが、素晴らしく楽しいクラス運営ができています。

英語筋肉を付けていく上で必要とされるクラスではないかと考えるので、この新しいクラスについて少し紹介する。このクラスは、実際に英語を活用することを目指したクラスである。やや上級者向けのクラスとして設定されていて、それゆえに、やや敬遠されているのだろうか。1クラスが10人に満たないクラスであるが、学生たちが自分の能力を開花させて、実に生き生きと英語らしい感覚を身に付けていく様子を、毎回嬉しい驚きを味わうのである。

毎回やっていることは、英語筋肉運動の基本中の基本。英語ネイティブ・スピーカーのCDの朗読を聞きながら、リアルタイムで全員同時に英語音読にチャレンジする。当然、ナチュラルな音読速度なので、肺活量が足りなく感じるが、それは英語のリズムの強弱と速度で調整することで、自然のリズムを再現できることが段々に分かってくる。家でも音読練習をしてもらう。ネットからダウンロードできるようにテキストが構成されていて、学生たちは各自、家でも練習が可能な状態になっている。

家で、自分一人で集中して、音読速度を上げる練習をすることで、英語を母国語とする朗読者の早い速度にも合わせることが出来るようになる。授業中実演をしたのちに、家での練習をしてもらう。時計を見ながら、一分間、自分の最も早い速度でテキストを読めるだけ読んでもらい、さらに次の音読で、先ほどの一分間で読んだ量よりも、一単語でも良いから多くの量を音読できるよう

に速度を上げて読んでもらい、そのあとテキスト全体を音読する。

その音読時のポイントがあって、それが主語と述語動詞を意識して、1セットとして音読をしながら、頭でその箇所が来るたびに、その音読運動のなかで、「今！主語と述語動詞」と、主語と述語動詞を捉える練習をしてもらうという点である。身体的筋肉を付ける時も同様だが、お腹を絞りたいのなら、腹筋の部分に意識を沿わせて運動する必要があるように、日本語の文章構成にはない語順を、筋肉として日本語思考回路の隣に構築するためには、運動としての英語音読動作とともに、「今！主語と述語動詞」と意識を喚起することが効果的である。

長年そのことを、普通の英語のクラスでも学生たちに伝えてきたが、実際に授業の時間を毎週使って練習をやり続けることはなかった、だから、学生たちは一回か二回くらい、家でやってみてくれたかもしれないが、成果を実感できなかったと思う。日本の大学英語学習に長いこと欠けていたのは、実はこの実技練習である。またそれと同時に、その意義がどこにあるかを言語化し、言葉で知的に、学生と認識を共有するというプロセスが、欠けていたように思う。大学生の理性に働きかけ、学生に意義を自覚してもらうことが大切なのである。現在までの所、実際に実技練習して、その意義を体感することが足りなかったのである。その代わりに何がふんだんにあったのかと言うと、先生側の、学生側からするとやや一方的な英語の使い方の文法説明と、それをする意義の解説が充分共有されることのない「練習問題」であったのだろう。教える側からすると、これで教えたのだから学生は分かったであろうと思うのだが、実際は頭では一応分かったつもりになったかもしれないが、実際に使う練習を充分していないので、使えない状態に変動はなかったのである。ここで生じる悲しい勘違いが、教える側は学生は勉強しない、聞いていないというものであり、学生側からは先生が何を言っているのか分からない、あるいは私は英語が分からない、であったのだと思う。

実際のところ、私自身、学ぶ側として、同時通訳の養成所に通っていた時、動機づけは充分あったはずなのだが、リアルタイムより若干遅れ気味のリピート、いわゆるシャドウイングという練習を初めの頃は毎回していたのだが、文字媒体のテキストがもらえていなかったの、耳だけで再現することは難しく、できないことをしているという無力感が強かった。その練習方法の意義も、愚かな私は聞いていなかっただけなのかもしれないが、知らされえることはなかったの、効果のほどを信じることができず、家でしっかり練習できなかった。そうこう

しているうちに、できないという感覚の方が上達したいという意識より強くなって、諦めの境地が生まれてくるのだ。そして、先生を批判するタイプの学習者ではなかったの、私に資質がないのだらうと、自分の能力を見限るのである。

しかしながら、そんな私であっても、このリアルタイム・リピート練習法に効果があることは、すでに養成所をやめて月日がたち、学生たちと英語力アップという企画に挑戦する日々が続いている時代に、自らも実感しながら、その有効性を力説するようになったのである。しかし、力説は弱いのである。実技練習で初めて、言葉は説得力をもつようになるからだ。

この新しいクラスは週に一回のクラスであり、また半期一回で終わってしまうクラスであるから、今後学生たちの力がどのくらい現状で開花できている能力を維持し、さらに上を目指せるかは楽観はできない。何しろ、英語学習は英語筋肉運動に支えられない限り、どんどん日本語思考回路に圧倒されて、か細くも育ち始めた英語思考回路はついには後退し、無くなっていくからである。これも、腹筋運動とまったく同じことである。

このクラスに参加してくれた学生の英語レベルはさまざまだが、やる気レベルは高く、良く声を出してくれて、練習にへこたれることなく、宿題もこなし、最後のクラス内英語スピーチでは、全員がリズム感覚良く、英語でプレゼンをしてくれた。文法的小さなミスや、少し大きめのミスもあるのだが、リズムが良いので、英語として聞けるのである。しかも、堂々としていて、それぞれが美しい自己表現のスタイルをもち、英語プレゼンを、英語筋肉に支えられた英語思考回路をもって、自己実現し、成功させていたのである。「国際人」誕生の、初めの一步である。恥ずかしい気持ちをもちながらも、自分を他者に見せることを、楽しめる自分を発見したからである。

英語で話すということは、英語で話している間、日本人の恥じらいをわきに置いて、英語の世界観のなかで、もう一つの自己を解放し、その新しい自己を作り上げていくことである。その時、私たちは日本語のなかにすでにある、恥じらい文化を捨てたわけではないのだ。恥じらい文化は大切に日本語を話すときに活用できるように維持しつつ、「何はどうする」という明確な主体と、そしてもしその後に「何を」という目的語である客体が来たときは、それに対する主体から客体への明確な行為の伝達を主体的に決定させ、その決定に責任をもつことを自分に課すということなのである。それが、他者に対して自分を語るといふことの意味である。

この思考回路をもったとき、自然と私たちは「具体的なこと」と「個人的なこと」を、そして自分たちがもつ「夢」のことも、日本語思考回路の時は集団の意向に敏感に反応し「恥ずかしい」と自粛していた私たちが、他者と自己の考えの違いを語ることで、分かち合いたいと考える、主体的な人間の一人として、語り始めるのである。これは日本語対英語との優劣の問題では全くない。なぜならば、私たちは日本人の「恥ずかしい」と感じる魂を失うこともなければ、あるいは日本人らしきものに何か別のものを接ぎ木して、日本文化に変更を加えることをするわけでもないからだ。単に私たちが日本文化の外に飛び出すことができる契機を、英語思考回路を構築することにより獲得することができるということだけなのである。私たちは失うものは何もなく、得するだけなのである。

これが、日本人の英語学習者の味わうことのできる、英語ネイティブ・スピーカーには味わうことのできない、日本人の英語学習者固有のメリットであり、日本人の英語学習者の英語学習の楽しさの一つの形なのである。歌舞伎という様式美の美しさの価値を知っている日本人にとって、この英語思考回路という様式の、日本語とは違和感のある異種なる様式と共存する楽しさは、きつと、格別であると思う。大いに肩の力を抜いて、英語学習を楽しもうではないか。

おわりに

求められているのは、何語であれ、人と人とのコミュニケーションである。以前英語を私と一緒に学習してくれた学生のなかには、いまでもエレベーターで会った時「ハロー」と挨拶を交わしてくれる学生がいる。その学生が受講してくれていた頃はまだ、共通テキストというのを使用していなくて、クラスもレベル分けになっていて、そのなかで、複数の先生が複数のテキストを使用して英語を教えていた。だから、学生は複数の先生の中から、また複数のテキストの中から自分の取りたいクラスを選択していたという意識が、今よりも強かったかもしれない。

私も、まずは英語を好きになってもらいたいと考えて、英語で話すことや、英語を発音することなど、できるだけ、学生たちが授業中に何らかの活動ができるようにクラスを組み立てようと計画していた。もちろん、いつも上手くいくわけではなくて、文法説明に時間を取り過ぎて、「高校英語」を学生たちに彷彿とさせることもあっただろう。でも、それでも、何となく私に英語で話しかけてみようかな、という空気が以前のクラスの学生には

あった。

ところが、現在「成績評価の厳格化」という流れに乗り、厳しく採点しますという姿勢を前面に出すようになってから、以前のような牧歌的「ハロー」の世界はやや後退し、私の方も常に成績のことを学生たちに思い出させるようになり、私に「ハロー」と挨拶してくれる英語クラスを履修している学生は、もはやいなくなったように思う。

これで良いはずがない。英語を学ぶということは、コミュニケーションを学ぶということである。自然に英語で話しかけたいくなるような先生が、教室の外に日常としていないのは、外国語を学ぶという意味において、異種なる者同士が異種なる言葉を使って何らかの意思疎通を果たそうとすることを、教えられていないことになるからである。挨拶をするのにも、勇気がいるのである。そういえば、アメリカではありとあらゆる人から「ハーイ」と声をかけられていた。これが、彼らの英語コミュニケーションの一つの形だ。主体は客体に働きかけることで、主体となる。言語の構造とまったく同じである。

自分を振り返ってみると、最近私は加齢現象も伴い、ニコニコしていないようである。しかも頭の片隅には私とは不釣り合いな「成績評価の厳格化」という文句が、忘れてはいけぬ標語として貼りついていて、気持ちが自由になれないようなのだ。そのことを思い出させてくれる事例を最後に一つ紹介し、本稿を閉じたい。

教授力を高める一環として、他の先生の授業を参観するという企画があり、先頃お願いして、一人の先生の英語のクラスを見せていただいた。私とやり方が全く違うことに一々驚き、大いに参考になったが、青天の霹靂のように印象深かったのが、その先生がいつもニコニコしていたことである。私の観察の及ぶ限り、教室内にはあまり先生がニコニコするような材料は見当たらないのだ。しかしその先生は笑顔をたやすことがない。その時初めて、そう言えば、私は最近授業中ニコニコしていないような気がする、自分の様子を思い出したのである。

クラスによって、上手く私をのせてくれたり、私の至らなさに目をつむって注意深く話に耳を傾けてくれたり、疲れていても一生懸命学ぼうとしてくれるクラスもあるが、なかには、携帯を忙しそうに手にして、注意してもすぐ同じことを繰り返したり、他のクラスの宿題らしきものをせせと仕上げていたりする学生がいるクラスもある。私は勉強をしてもらいたいと願うので、注意をする、というパターンをとるが、そのうちに注意することに気持ちがいつてしまい、頑張って勉強をしようとしてくれている多くの学生たちを置き去りにすることもあるように思う。しかし、この先生は一度も注意することな

く、笑顔で肅々と授業を続け、それなりの秩序がゆっくり生まれていき、勉強に励んでいた人も、励まなかった人たちも、幸せそうに達成感をもって、クラスを終えたのである。

私にとっての「異文化」体験はいたるところにあるのだ。私の英語のクラスの運営法はもしかすると、英語圏の文化の影響を受けた教え方であるのかもしれないとその時思った。日本人の英語学習者を教えるときは、彼らの恥じらい文化を尊重し、そっとしておいてあげるのも、一つの授業の形ではないかと考える貴重な機会をもらった。

でも私はやはり、英語筋肉運動を学生と共にやり、英語筋力を、学生と共に身に付けたい。私の英語力を上げ、私の英語教授力を上げ、でき得ることならば人間力も上げて、学生との知のキャッチボールを英語でしてみたい。しかしその目的の前にある大きな存在が、私たちが共に人間であり、怒ったり、泣いたり、すねたり、怠けたり、小さなウソをついたりする「なまもの」であって、その人間をいかなる意味においても、傷つけてはならないという、絶対的真理である。私が無理やり英語筋肉運動もどきをおこなった際に、「私は英語ができない」と、逆効果を与えてしまったこともあるだろう。お互いに相性もあるだろうし、お互いに面白くないこともあるだろう。でもそれでも、英語学習がおもしろくて、少しでも練習を積んでくれれば上手になる部分が増えていって、自分のなかに英語思考回路ができると、日本語の世界観では自由になれなかった部分の自分が自由を獲得できるかもしれないという、そのあたりまで、学生たちと共に、英語学習をしていきたいというのが、日本の大学教育における英語学習に私が求める、現在の到達目標である。

今期も終わろうとしていて、学生授業アンケートには様々な声が寄せられている。私は私が共に英語学習をする学生に育てられ、学生は英語学習において私に育てられる。英語だけでなく、他の科目も教えているから、他の科目でも同様のことが言える。そして、全ての私の教えている教養科目に対して言えることは、よく学生たちがこの人間として未熟な私にそれなりに寄り添ってくれ

て、無事に今期を終えてくれたなあという感慨である。成績を実際に付けるときには、胸が痛むこともあるだろう。あるいは間違いを見つけて、こんなことも分かっていなかったのかと感情のボルテージを上げることもあるかもしれない。

英語学習に終わりはなりが、現段階の英語学習目標はしっかりと私にはある。英語筋肉をつけて、できれば笑顔とともに、日本人の私たちが日本の外に飛び立つこともできる英語筋力を所有することである。そして、これから達成されていくであろう、この目標に向かって、これからは試行錯誤を繰り返していくことである。それに加えて、でき得ることならば、将来学生たちから英語で挨拶をされた時、それが、日本的思考回路と英語的思考回路をもつ一人の人間としての私と、同じように、日本的思考回路と英語的思考回路をもつもう一人の人間としての「あなた」との、喜びに満ちた、交流の始まりであって欲しい。

参考文献

- 浜田美佐子, 「エミリー・ディキンソンの詩を地域の社会人の方々と読む——生涯学習「エクステンション講座——エミリー・ディキンソンの詩を楽しもう!」を担当して学んだこと」, 『東海女子大学紀要』第26号(2006)平成19年, 105—113.
- , 「『赤毛のアン』を地域の社会人の方々と読む——生涯学習「エクステンション講座——原書で読む『赤毛のアン』を通して学んだこと」『東海学院大学紀要』第1号(通号第27号)(2007)平成20年, 57—67.
- 本多勝一, 『日本語の作文技術』, 朝日新聞社, 1982.
- 柴田バネッサ, 『はじめてのウィスパリング同時通訳』, 南雲堂, 1997.
- 白畑知彦, 若林茂則, 村野井仁, 『第二言語習得研究——理論から研究法まで』, 研究社, 2010.
- 白井恭弘, 『外国語学習の科学——第二言語習得論とは何か』, 岩波書店, 2008.
- , 『英語教師のための第二言語習得論入門』, 大修館書店, 2012.
- 鈴木孝明, 白畑知彦, 『ことばの習得——母語獲得と第二言語習得』, くろしお出版, 2012.